

# 韓国語と日本語の音調に関する実験音声学的対照研究\*

-江陵方言と鹿児島方言を中心に-

高慧禎\*\*

## 〈 Abstract 〉

### An experiment phonetic contrast study of Korean and Japanese tone:

Through Gangneung dialect and Kagoshima dialect

The purpose of this study is to explore the feature of tone on Gangneung dialect and Kagoshima dialect from the experimental phonetic viewpoint, as well as in terms of the generation (young and middle-aged), sex and dialect. Results of the research are as follows.

(1) The feature of Gangneung dialect is that the phonological distinction between tone and duration 'shakes' in the middle-aged generation unlike that in the old generation. I found a certain tendency that in accent phrase unit the auslaut has a falling type, in other words, the second syllable from the auslaut is high.

(2) The feature of Kagoshima dialect is that the phonological tone distinction, 'auslaut rising accent type' and 'auslaut falling accent type' (Hayada's accent-type theory), in the middle-aged generation shakes a bit. From the phonetic point of view, the auslaut falling accent type is mainly found, or plat accent is found.

The comparison of the findings of the two dialects suggests that the similar pattern of the auslaut falling accent type, one of the feature of tone in Kagoshima dialect, is found in Gangneung dialect.

Field : Phonetics · Phonology

Keywords : Gangneung dialect, Kagoshima dialect, Accent phrase, Pitch pattern, Auslaut falling accent type

## 1. はじめに

1970年代から江原道方言に関するアクセント研究が行われてきたが、最近はこうした成果が見当たらない。代表的なプロソディ研究として、李(1981)、J.M, Yun(1987)、C.K, Kim(1999)、J.W, Kim(2003) などが挙げられる。

李(*ibid*)は、江陵方言は第1音節に限って高調[H]と低調[L]の対立を持つ声調言語であり、また、第1音節に長短の対立がある長さ言語であると報告した。一例として、「ユンノリ」という意味の「개[kε]」

\* This work was supported by the National Research Foundation of Korea Grant funded by the Korean Government (NRF-2012S1A5A8024021)

\*\* カトリック関東大学校 助教授、音声学・音韻論

は[H]音調で短いが、「犬」という意味の「개[kæ:]」は[L]音調で長いということが挙げられよう。これまでに言及されてきた江原道嶺東方言の音調<sup>1)</sup>に関する学説を示しておく。

〈表1〉 江原道嶺東方言の音調に関する学説

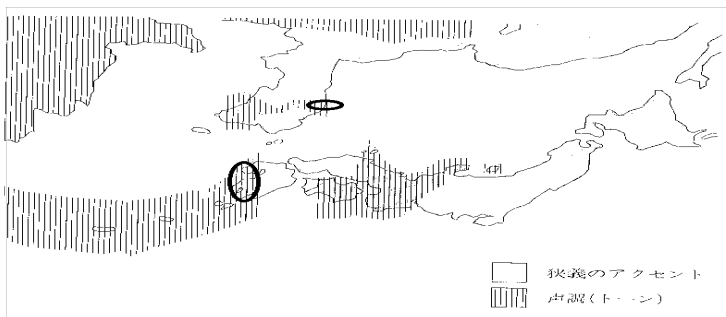
学説	分類	アクセントの本質
李(1981)	声調言語(高・低の二体系)と長さ言語	示差的
J.M. Yun(1987)	声調言語と音長言語の二元的体系	
早田(1999)	単語声調(高・低・長音化の三つの聲調素)	

〈表1〉のような江陵方言に関する研究は、調査当時の被験者は老人層のみを対象にしていることから、現在、江陵方言における音調体系がまだ保存されているのかを音響音声学的観点から検討していきたい。また、江原道方言が日本語鹿児島方言のアクセントに類似しているという早田(1999)の研究成果を再検証する。これに関する早田説は、以下の〈表2〉に示す。鹿児島方言の音調<sup>2)</sup>を「語末上昇調」と「語末下降調」の二種類に分類している。網掛け(□)は高さの頂点を表す。

〈表2〉 日本語鹿児島方言における音調パターン

意味	語末上昇調		語末下降調		
	単独形	助詞付加形	意味	単独形	助詞付加形
火	ヒ	ヒガ	日	ヒ	ヒガ
花	ハナ	ハナガ	鼻	ハナ	ハナガ
油	アブラ	アブラガ	車	クルマ	クルマガ

〈図1〉 日本およびその周辺のアクセント分布図<sup>3)</sup>



- 1) 音調とは、話し言葉における相対的な声の高さの様相を言うが、この用語は声調、アクセント、イントネーションなどのほか、上昇調や下降調といった型そのものをさしていることもある。本稿で用いた音調の意味は、語レベルでの声調やアクセントのことと、句レベルでのイントネーションのことを含めている。詳細は城生他(2011:314)を参照されたい。
- 2) 上野(2000)は「N型アクセント」と見なしており、その音調の特徴は語句の末尾から二つ目の音節にアクセントが置かれると指摘している。
- 3) 早田(1999:30)より引用した。ここで「狭義のアクセント」というのは東京方言や博多方言のような「位置」が問題になるアクセントのことを言うが、鹿児島方言のような「種類」が問題になるアクセントのことを「声調(トーン)」と呼んでいる。

上述した〈表2〉に関わる日本およびその周辺のアクセント分布を〈図1〉に示した。○で記したところは、本研究の対象になった韓国の江原道江陵地域と日本の鹿児島地域が含まれており、そこで話されている各方言は〈図1〉で確認できるように単語声調に分類されている(早田1999)。

## 2. 先行研究

### 2.1 韓国語江陵方言における音調の特徴

従来の江原道江陵方言に関する音声学的研究にはC.K, Kim(1999)、J.W, Kim(2003)などが挙げられる。C.K, Kim(*ibid*)は、3音節語の場合、語レベルでは第2音節目が高く実現されるのに対し、句レベルでは第3音節目が高くなるということを報告した。音響分析した結果の一例を以下の〈表3〉に示す。

〈表3〉「蛙」という意味の「깨구리<sup>4</sup> [kɛɡuri]」に対する基本周波数値(単位:Hz)

音調	単語	助詞	第1音節	第2音節	第3音節	助詞
語レベル	깨구리		190	228	213	
句レベル	깨구리	가	222	274	295	246
	깨구리	느	204	226	258	218

また、J.W, Kim(*ibid*)は、江原道方言は慶尚道方言と同様に、三つの「語節声調型」を持っていると報告している。例えば、〈表4〉に示されている「채수[tʰɛsu]」の音響分析の結果から分かるように、第1音節が上昇調に実現され、また第2音節が第1音節の第2モーラ目より高く現れることが江原道方言の音調の特徴としてあげられよう。

〈表4〉「野菜」という意味の「채수[tʰɛsu]」に対する基本周波数値(単位:Hz)

音調	単語	助詞	第1音節	第2音節	助詞
句レベル	채수	르	225-259	366	296
	채수	도	250-269	300	211

一方、日本内で江原道方言に関して言及した音声研究はそれほど多くない。代表的な研究としては早田(1999)が挙げられる。〈表1〉に触れたように、早田(*ibid*:106)は韓国語の三陟方言について

語声調言語であり、各単語は三つの声調素、「下降」/˨˨/、「上昇」/˨˨˨/、「長音化」/:/のうちのいずれを持つ。

と述べている。1音節語「말[mal]」に対する三つの声調素の一例を取り上げ、〈表5〉に示しておく。

4) この単語は江陵地域で話されている方言である。〈表3〉および〈表4〉に示した単語と助詞も江陵の訛りで表している。

〈表5〉における記号「v´」は高、「v」は低、「v↓」は高から低への下降、「v:」は長音化された母音を表している。

〈表5〉 1音節語「말[ma:]」に関する三つの声調素の一例

単語	意味	実際のピッチ形	音韻表示
말	馬	mâl	/˘ mar/
말이	馬+が	mâr+i	/˘ mar+i/
말	斗	mâl	/˘ mar/
말이	斗+が	mâr+i	/˘ mar+i/
말	ことば	mâ:l	/:mar/
말이	ことば+が	mâ:r+i	/:mar+i/

## 2.2 日本語鹿児島方言における音調の特徴

これまでに行われてきた日本語鹿児島方言に関するアクセント研究は多数あるが、管見の及ぶ範囲で平山(1951、2010)、早田(1999)、窪菌(2007)、木部(2010)などの研究が挙げられる。これらの研究のうち、早田(*ibid.*:24)は、鹿児島方言の音調の特徴を以下のように述べている。

(前略)「鼻」は文節の最後で声が下降し、「花」は文節全体がやや低く平らに続いて文節末がやや上昇する、というアクセント情報をもっていると考えられる。この方言では単語の長さに関係なくこの2種類のアクセント形しかありませんから、「二型アクセント」と呼ばれたりしております。

これに対して、窪菌(*ibid.*:111)は、鹿児島方言の韻律特徴について、次のように捉えている。

語末から二つ目の音節が高く発音される型(A型)と語末音節が高くなる型(B型)の二型である。(中略)二型アクセントとならんで鹿児島方言のアクセントを特徴づけるのが、音節主体の体系という点である。

このように、鹿児島方言は東京方言のアクセント体系とは違い、アクセントの付与単位がモーラではなく、「音節」を単位とする「シラビーム方言」であり、また、音調の特徴は二つのアクセント型しか保存されていないという点が読み取れる。鹿児島方言のアクセント体系を木部(*ibid.*:28)は〈表6〉のように示している。「↓」は音節内の下降を、「●」は高い頂点を表す。

〈表6〉 鹿児島方言のアクセント体系

アクセント型	1音節	2音節	3音節	4音節
A型	○、	●○	○○●○	○○●○
B型	●	○●	○○●	○○○●

### 3. 研究の目的

本研究では、現時点における韓国語江陵方言における音調の特徴について実験音声学的観点から探ることを目的とする。特に、本実験は韓国語江原道方言のアクセント体系が日本語鹿児島方言のアクセント体系に類似しているという早田(1999)の主張を視野に入れて、韓国語江陵方言における音調の特徴を日本語鹿児島方言と対照させながら音響分析を行う。また、本実験では高さに注目した考察を行う。

### 4. 研究方法

#### 4.1 被験者

江陵方言母語話者と鹿児島方言母語話者、男女別各3名にお願いして録音をとらせていただいた。今回の実験ではアクセントの変化に注目しているため、20代後半<sup>5)</sup>から40代までの男女を対象にして分析を行った。本実験に協力していただいた被験者の情報は〈表7〉の通りである。

〈表7〉被験者の情報

番号	韓国語江陵方言母語話者				日本語鹿児島方言母語話者			
	名前	性別	歳	言語形成地	名前	性別	歳	言語形成地
1	C.O.N	女性	34 歳	江原道 江陵 沙川面	H.S	女性	29歳	鹿児島県 鹿児島市
2	C.Y.R	女性	27 歳	江原道 江陵 浦南洞	O.M	女性	43歳	鹿児島県 始良市
3	S.M.S	女性	48 歳	江原道 江陵 魯巖洞	O.Y	女性	43歳	鹿児島県 始良市
4	K.N.C	男性	25 歳	江原道 江陵 浦南洞	S.K	男性	33歳	鹿児島県 始良市
5	P.I.Y	男性	33 歳	江原道 江陵 江東面	N.Y	男性	32歳	鹿児島県 始良市
6	J.K.H	男性	33 歳	江原道 江陵 玉溪面	O.Y	男性	45歳	鹿児島県 熊毛郡

#### 4.2 実験機器

本実験は2013年1月15日から2月15日にかけて約1ヶ月、鹿児島県内と江陵地域で行った。分析資料の録音はEDIROLR-09HR(EDIROL社製)にD112ダイナミックマイクロフォンを接続して行った。この際、サンプリングレート48kHz、量子化16bit、ステレオでデジタル録音した。録音に先立ち、日本語鹿児島方言の場合は、日本語で記入されているカードを渡し、読み上げ練習を行った後、本実験に入った。単独発話で一枚ずつめくりながら、自然なスピードで読み上げるように注意を払った。録音は全ての単語について3回行った。1回目は分析資料の順番通りに読んでもらい、2回目はその逆の順番通りに、3回目は分析資料をランダムにして読んでもらった。また、韓国語江陵方言の録音も日本語とほぼ同じ方法で行った。データ編集にはCool Edit96を用いた。

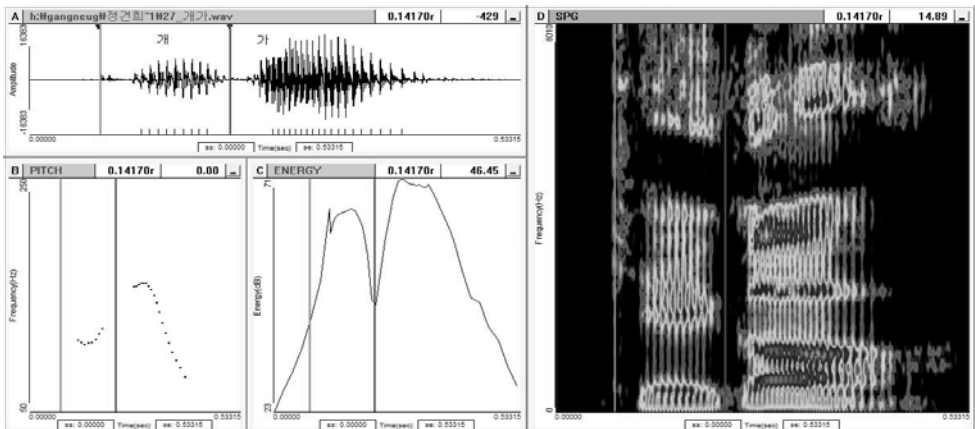
5) 本実験では30代、40代の数が多く、20代後半の被験者も少数含まれているが、本実験による分析結果から、20代後半の被験者も中年層による結果とさほど変わらなかったことをここに示しておきたい。詳しくは今後の報告に譲りたい。

### 4.3 分析方法

音響分析は解析ソフトMulti-speech(Kay社製)を用いて行った。分析の際は、両言語における音調の特徴を探ることが主な目的とするため、ここでは物理量としてのピッチを測定して定量化した。ピッチの解析方法に関しては<図2-1>に示した原波形(A画面)にVoice period marks(声帯振動の区間)を描かせ、B画面に語全体のピッチ曲線を描かせた。その後、第1音節の部分(カーソルで挟まれている「개[kɛ:]」のところ)を選択し、<図2-2>に示した Multi-speech の pitch contour のアルゴリズムによるピッチの最高値および最低値、中央値のF0を測定した。

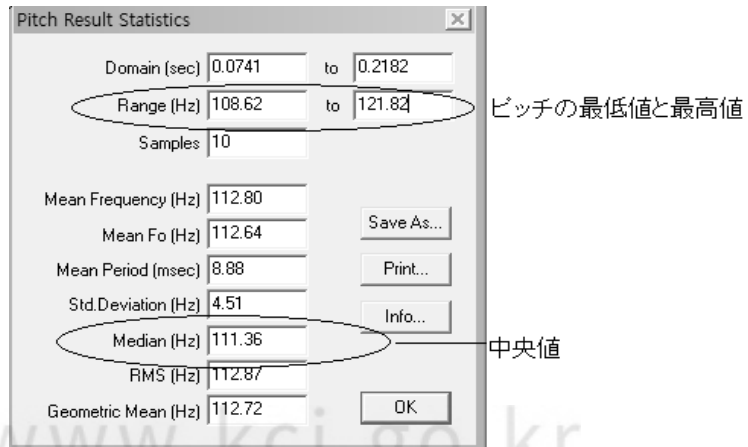
<図2-1>男性話者による「개가(犬が)」 [kɛ:ɟa] の例

(A画面:原波形、B画面ピッチ曲線、C画面:インテンシティー曲線、D画面:スペクトログラム)



<図2-2> ピッチの測定基準

ピッチの最低値:108Hz、最高値:121Hz、中央値:111Hz



## 4.4 分析資料

まず、分析資料を作成する際には、従来の韓国語江陵方言における音調の特徴を考慮し、音韻論的にアクセントと長短の対立によって単語の意味が異なる言葉を選んだ。1音節語から4音節語における「名詞形」の21語と、その名詞形に助詞「[i]」か「[ga]」が付く句レベルでの21語を付け加えて本実験の分析資料とした。〈表8〉は韓国語江陵方言における分析資料である。また、〈表9〉に示した日本語鹿児島方言の分析資料も韓国語と同様に音韻論的にアクセントの対立がある言葉を選び、その語例は平山(2010:92)の『全国アクセント辞典』から引いた。1音節語から4音節語における語レベルの11語と、助詞「が」が付く句レベルでの11語を付け加えたものを用いた。〈表9〉における網掛けの部分は高い頂点を表し、その後に「下がり目」があることを示す。

〈表8〉 韓国語江陵方言における分析資料一覧<sup>6)</sup>

音節数	単独形	意味	助詞付加形
1音節語	mal	馬	mal+i
		話	
		米を数える単位	
	chim	荷物	chim+i
		海苔	
		ほやほや	
kae	畑の草	kae+ga	
	犬		
2音節語	kame	ユンノリ	kame+ga
		頭	
		駕籠	
	uri	釜	uri+ga
豚			
3音節語	我々	keguri+ga	
	蛙		
	父		
4音節語	aboji	keguri+ga	
	samakwi		
	カマキリ		
	コオロギ		
4音節語	kwitturami	kwitturami+ga	
	hebaragi		
	ひまわり		
	祖父		
4音節語	haraboi	haraboi+ga	
	basogari		
4音節語	basogari	basogari+ga	
	簾籠		

www.kci.go.kr

6) 〈表8〉における韓国語の単語は今江陵地域で話されている訛りであり、便宜上、音韻表記で示した。

〈表9〉日本語鹿児島方言における分析資料一覧

音節数	意味	単独形	助詞付加形
1音節語	柄	え <small>が</small>	え <small>が</small>
	絵	え <small>が</small>	え <small>が</small>
2音節語	橋	は <small>し</small>	は <small>し</small> が
	箸	は <small>し</small>	は <small>し</small> が
	端	は <small>し</small>	は <small>し</small> が
	水	み <small>ず</small>	み <small>ず</small> が
	猿	さ <small>る</small>	さ <small>る</small> が
3音節語	昔	む <small>か</small> し	む <small>か</small> し <small>が</small>
	朝日	あ <small>さ</small> ひ	あ <small>さ</small> ひ <small>が</small>
4音節語	篝火	か <small>が</small> り <small>び</small>	か <small>が</small> り <small>び</small> が
	色紙	いろ <small>が</small> み	いろ <small>が</small> み <small>が</small>

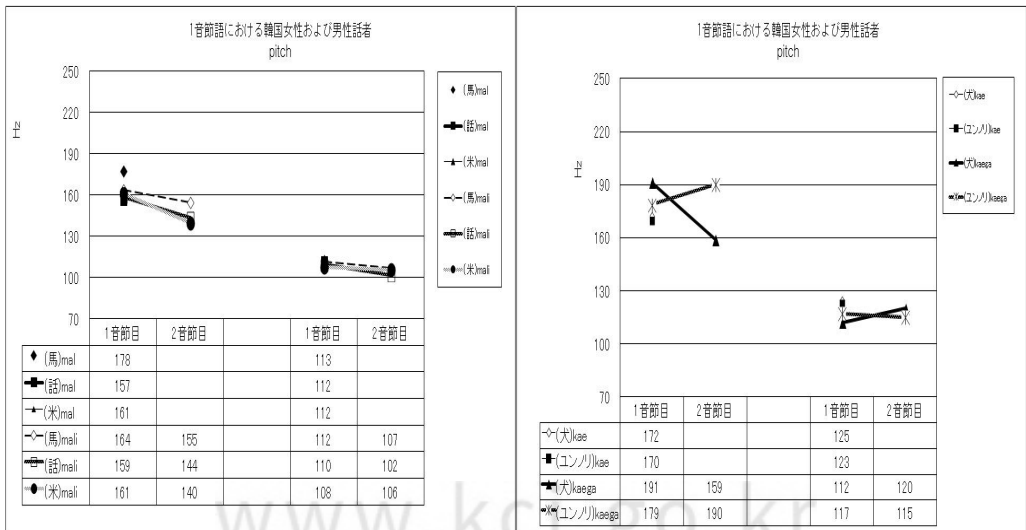
## 5. 実験結果

### 5.1 韓国語江陵方言におけるピッチパターン

〈図3〉~〈図6〉は江陵方言母語話者における男女別のピッチの結果である。その結果は音節ごとの中央値を男女別に平均してグラフに表したものである。単位はHzである。

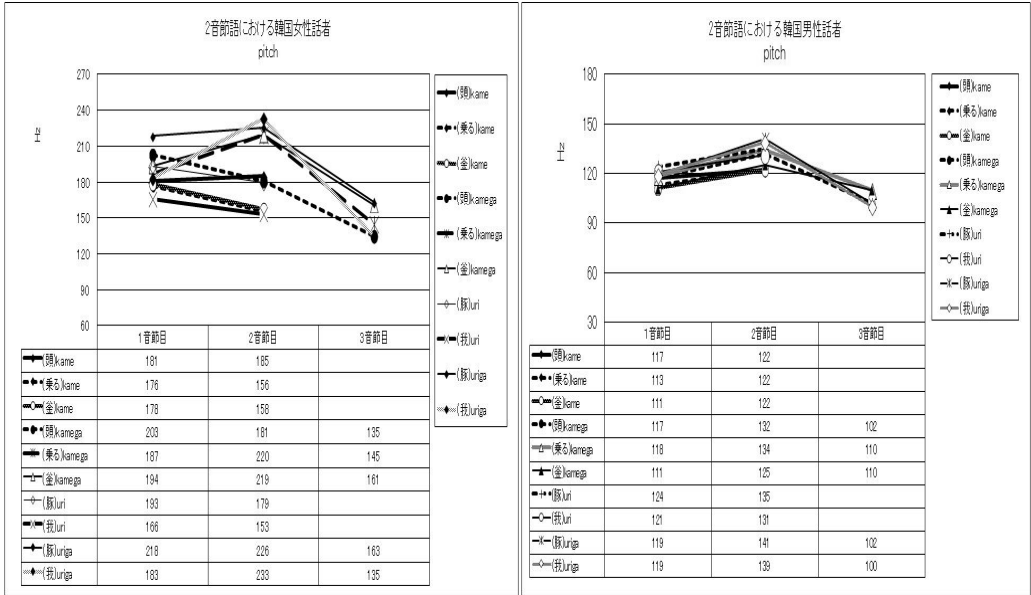
#### (1) 1音節語におけるピッチパターン

〈図3〉 /mal/と/kae/ (左側女性、右側男性) 助詞付加形: HLパターン、または、LHパターン



(2) 2音節語のピッチパターン

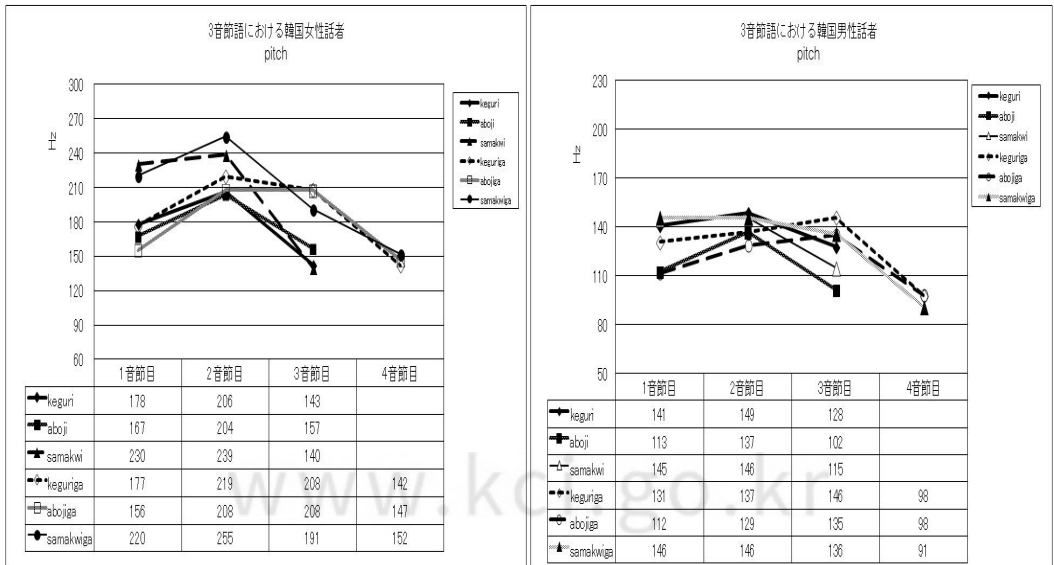
〈図4〉 /kame/と/uri/ (左側女性、右側男性) 助詞付加形: HHLパターン、または、LHLパターン



(3) 3音節語のピッチパターン

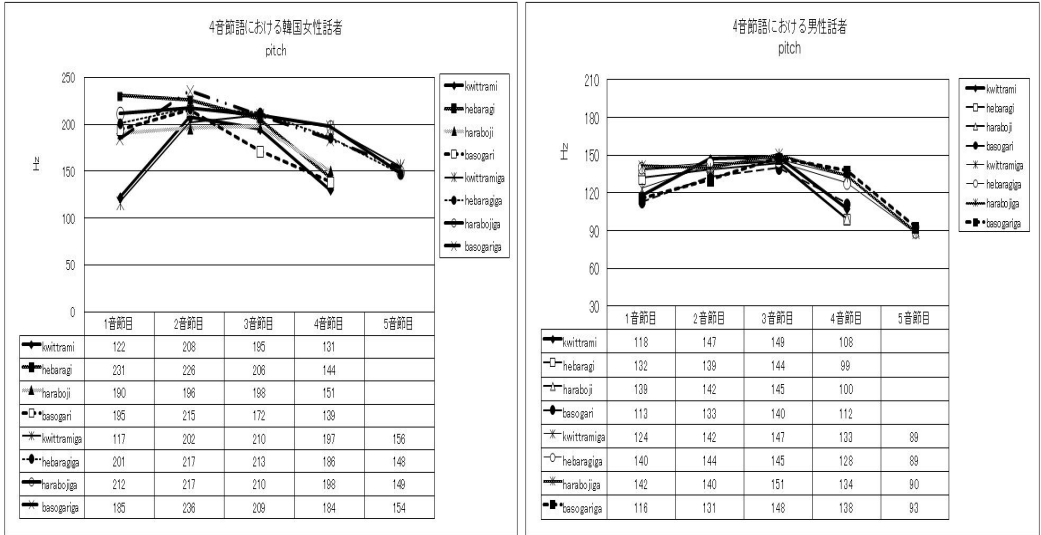
〈図5〉 /keguri(蛙)/と/aboji(父)/と/samakwi(カマキリ)/ (左側女性、右側男性)

助詞付加形: LHHLパターン、または、HHHLパターン



(4) 4音節語のピッチパターン

〈図6〉 /kwitturami(コオロギ)/と/hebaragi(ひまわり)/と/haraboi(祖父)/と/basogari(簾籠)/  
(左側女性、右側男性) 助詞付加形: LHHHLパターン、または、HHHHLパターン

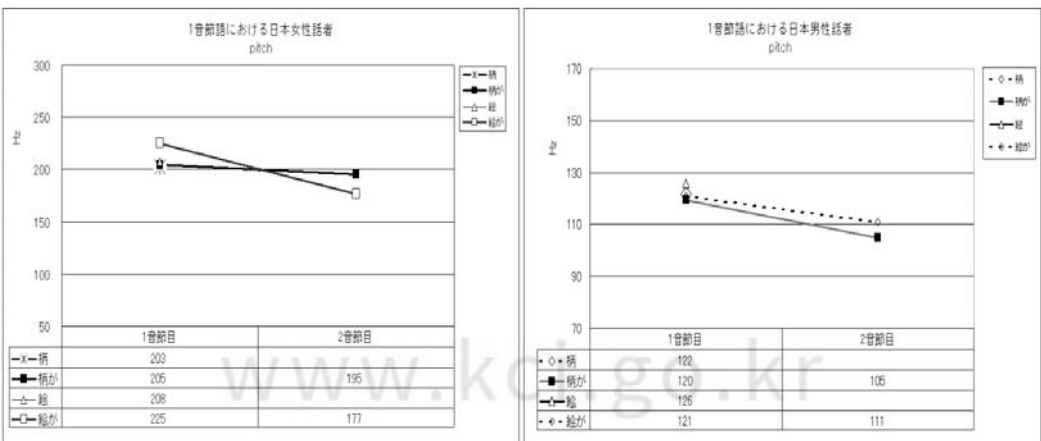


5.2 日本語鹿児島方言におけるピッチパターン

〈図7〉~〈図11〉は、鹿児島方言母語話者における男女別のピッチの結果を示したものである。その結果は音節ごとの中央値を男女別に平均してグラフに表したものである。単位はHzである。

(1) 1音節語のピッチパターン

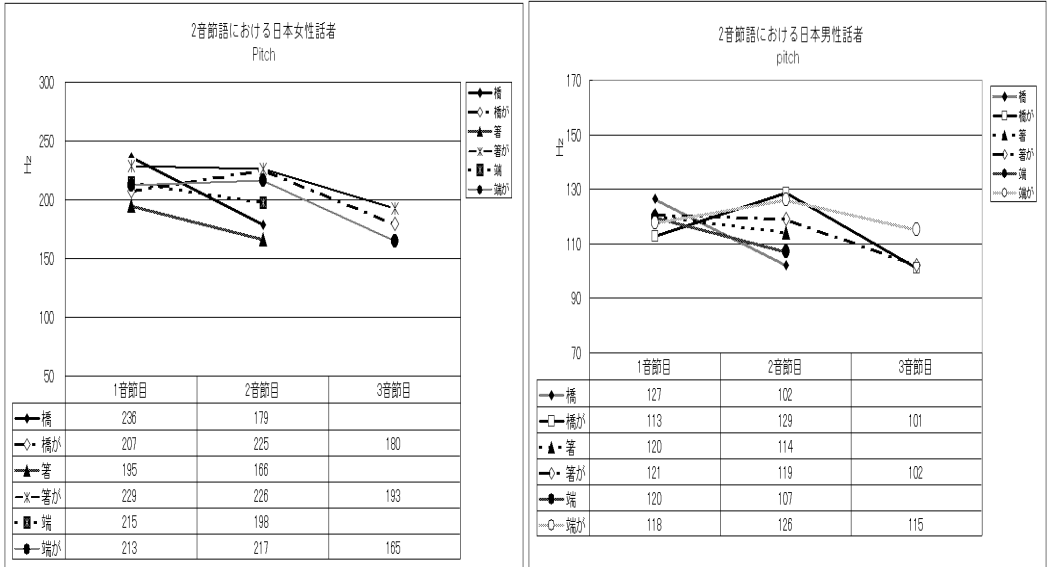
〈図7〉「柄」と「絵」(左側女性、右側男性) 助詞付加形: HH(平ら)パターン、または、HLパターン



(2) 2音節語のピッチパターン

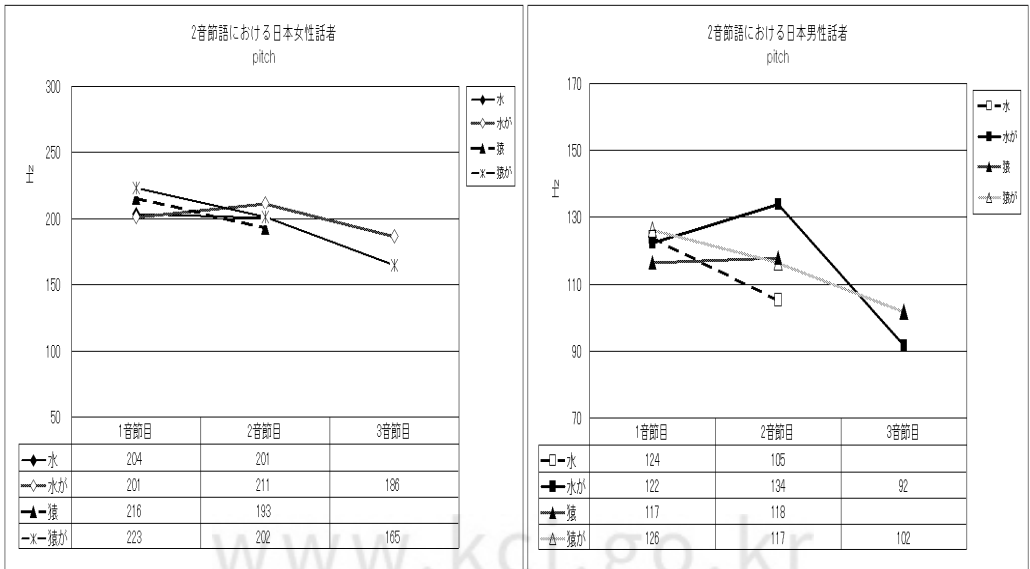
〈図8〉「橋」と「箸」と「端」(左側女性、右側男性)

助詞付加形: LHLパターン、または、HHLパターン



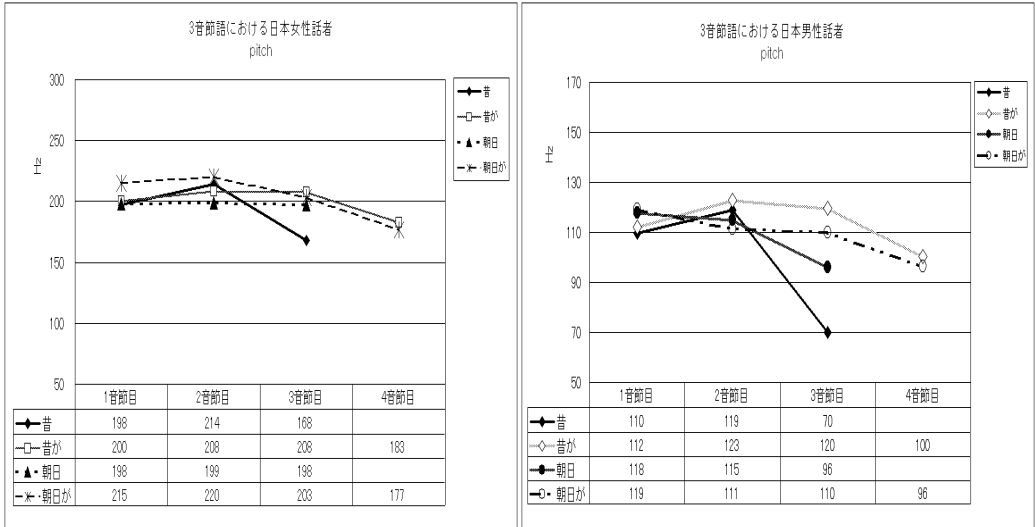
〈図9〉「水」と「猿」(左側女性、右側男性)

助詞付加形: LHLパターン、または、HHLパターン



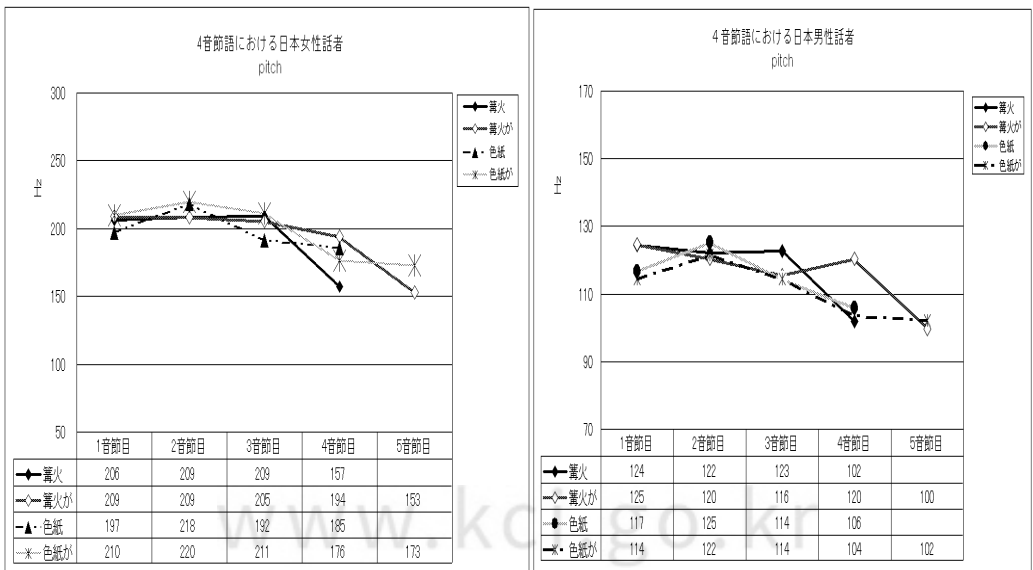
(3) 3音節語のピッチパターン

〈図10〉「昔」と「朝日」(左側女性、右側男性)  
 助詞付加形: LHHLパターン、または、HHHLパターン



(4) 4音節語のピッチパターン

〈図11〉「篝火」と「色紙」(左側女性、右側男性)  
 助詞付加形: HHHHLパターン、または、LHHHLパターン



## 6. 考察

### 6.1 韓国語江陵方言におけるピッチパターン

〈図3〉~〈図6〉および〈表10〉から分かるように、韓国語江陵方言話者の若年層および中年層では、単語を区別しようと努力はしているものの、アクセントの区別はできていなかった。よって、この年齢層においてはアクセントがゆれている過渡期にあるのではないかと推測される。

まず、語レベルにおけるピッチパターンについて述べる。以下の〈表10〉から確認できるように、1音節語の場合、「ユンノリ」という意味の「개[ke]」と「犬」という意味の「개[ke:]」におけるピッチパターンの結果をみると、どちらも同じような [H] 音調で現れた。この結果は「ユンノリ」の「개[ke]」は [H] 音調で短い、「犬」という意味の「개[ke:]」は [L] 音調で長いという李(1981)の報告とは一致しなかった。

次に、句レベルにおけるピッチパターンの結果について述べる。本実験では、1音節語「개[ke:]」と「개[ke]」を除き、助詞「이[i]」と「가[ga]」が付くと、ピッチパターンが固定されることが明らかになった。〈図5〉および〈表10〉から確認できるように、語末から二つ目の音節が高く実現された後、語末が下がる「語末下降調パターン」になっていた。例えば、3音節語の「깨구리가[ke9uri9a]」の場合、第2音節目から高くて第3音節目にかけて高い音調を保った後、徐々に語末が下がっていく [LHHL] パターンになっていた。このような結果は「句レベルで第3音節目が高くなる」というC.K. Kim(1999)の見解と一致した。しかし、3音節語の「사마귀가[samakwi9a]」の場合は、男女別に第1音節目の高さがゆれていた。男性話者は第1音節目が高く始まっていたが、女性話者の場合は二つ目の音節より第1音節目が相対的に低く始まっていた。このことは、韓国語の場合、「子音の要素が母音のピッチを変動させる」という高(2007、2012)のマイクロプロソディ的な特徴に起因したものと予測される。また、単独発話による韓国語のアクセントは語頭音節に来るというPolivanov(1938)の見解が証明されたものと考えられる。以下の〈表10〉に韓国語江陵方言におけるピッチパターンの結果を示しておく。ここでは音声表記として高い音はHで、低い音はLで示す。単語の記号は音韻表記で示しておく。

〈表10-1〉 韓国語江陵方言におけるピッチパターン

1音節語				2音節語			
意味	単語	単独形	助詞付加形	意味	単語	単独形	助詞付加形
馬	mal	H	HL	頭	kame	HL, LH	HHL,LHL
話		L,H		駕籠		HL, LH	LHL
米の単位		L,H		釜		HL, LH	LHL
ユンノリ	kae	H	HL, LH	豚	uri	HL, LH	LHL
犬		H		我々		HL, LH	LHL

〈表10-2〉 韓国語江陵方言におけるピッチパターン

3音節語				4音節語			
意味	単語	単独形	助詞付加形	意味	単語	単独形	助詞付加形
蛙	keguri	LHL	LHHL	コオロギ	kwitturami	LHHL	LHHHL
父	aboji	LHL	LHHL	ひまわり	hebaragi	LHHL	LHHHL
カマキリ	samakwi	LHL,	LHHL,	祖父	haraboi	LHHL	LHHHL
		HHL	HHHL	簾籠	basogari	LHHL	LHHHL

## 6.2 日本語鹿児島方言におけるピッチパターン

〈図7〉~〈図11〉および〈表11〉から確認できるように、日本語鹿児島方言話者の20代後半から中年層においても、韓国語江陵方言話者のように単語の区別に注意を払って発話しても、単語に置かれているアクセント型の区別はできていなかった。つまり、この年齢層ではアクセント型がゆれていた。本実験の結果を以下の〈表11〉に示す。音韻表記として「○」は音節内の下降を、「●」は高い頂点を表す。

〈表11〉 日本語鹿児島方言におけるピッチパターン

音節数	意味	音韻論的アクセント		音声学的アクセント	
		アクセント型	助詞付加形	単独形	助詞付加形
1音節語	柄	●	● ○	L	HH, HL
	絵	●	○ ●	L	HL
2音節語	橋	●○	○● ○	HL	LHL
	箸	○●	○○ ●	HL	HHL
	端	○●	○○ ●	HL	HHL, LHL
	水	●○	○● ○	HL	LHL
	猿	○●	○○ ●	HL, LL	HHL
3音節語	昔	○●○	○○● ○	LHL	LHHL
	朝日	○○●	○○○ ●	HHL	HHHL
4音節語	篝火	○○●○	○○○● ○	HHHL	HHHHL
	色紙	○○○●	○○○○ ●	LHHL	LHHHL

まず、語レベルにおけるピッチパターンについて述べる。〈図7〉の「柄」と「絵」の結果に注目すると、女性の場合、「柄」が203Hzであり、「絵」は208Hzであった。つまり、「絵」の方が「柄」より5Hzほど高かったが、さほどの差は見られなかった。男性の場合も同様に、「絵」の方が「柄」より6Hzほど高くなっていた。このことはほぼ同じ音のように発音されていたと考えられる。また、2音節語の場合、実際に下降調と平坦調のような「二つのパターン」が実現されたが、それぞれの単語に対するアクセント型の識別はできていないことが分かった。この結果は、窪菌(2007)と木部(2010)で主張している「二つのアクセント型」があるという見解と一致しない。

次に、句レベルにおけるピッチパターンについて述べる。句レベルにおける実験の結果からは、助詞「が」が付く場合、1音節語のみは平坦調と下降調のような「二通りのパターン」が現れたが、それ以外の結果については韓国語江陵方言のように語末が下がる「語末下降調パターン」が見られた。この傾向は、早田(1999)のアクセント説でいう「語末上昇パターン」は現れず、「語末下降パターン」のみが現れ

たことになる。

以上のことから、若年層および中年層においては鹿児島方言に保有されている「二通りのアクセントパターン」が揺れていると考えられる。

## 7. まとめと今後の課題

本実験は韓国語江陵方言と日本語鹿児島方言における音調の特徴について各方言話者の20代後半から40代までを対象にして音響音声学的観点から検討した。その結果は以下のとおりである。

(1)韓国語江陵方言：音韻論的に保有しているアクセント型の区別はできていないことが分かった。一方、助詞「が」が付く場合は、語末から二つ目の音節が高く実現された後、語末が急激に下がる「語末下降調のパターン」がきまって現れることが確認できた。

(2)日本語鹿児島方言：音韻論的に保有しているアクセント型の区別ができていないことが分かった。また、早田(1999)でいうアクセント説の「語末上昇パターン」と「語末下降パターン」、二通りのパターンは現れず、助詞「が」が付く場合、韓国語江陵方言のように語末が下がる「語末下降パターン」のみが実現された。

したがって、本実験では、助詞「が」が付く場合、韓国語江陵方言は日本語鹿児島方言のアクセントパターンと似通ったパターンが見られ、早田(1999)でいうアクセント説の一通りの「語末下降パターン」が現れるということが立証されたことになる。

今後は高さだけでなく、長さや強さにも注目して更なる検討が必要であるとする。また今回は若年層の被験者が少なかったが、被験者の数を増やして世代別におけるアクセントの変化に着目し、本実験の結果を追認していきたいと思う。

### 【参考文献】

- Kim, C.K.<김차균> (1999) 「三陟方言と江陵方言声調の比較」 『韓国語方言声調の比較』 역락 pp.1009-1219 (김차균(1999) 「삼척방언과 강릉방언 성조의 비교」 『우리말 방언 성조의 비교』)
- Kim, J.W.<김주원> (2003) 「江原道東海岸方言声調の特徴」 『民族文化論叢』 第27輯嶺南大学校 民族文化研究所 pp.249-283 (김주원(2003) 「강원도 동해안 방언 성조의 특징」 『민족문화논총』 제27집 영남대학교 민족문화연구소)
- 李翊燮 (1981) 『嶺東嶺西の言語分化—江原道 言語地理学』 ソウル大学校出版部 (이익섭(1981) 『嶺東嶺西의 言語分化—江原道 言語地理學』 서울대학교 출판부)
- Yun, J.M.<윤종남> (1987) 「江陵方言の超分節音素に対する考察」 『東岳語文論集』 22号 pp.355-382 東国大学校 東岳語文学会 (윤종남(1987) 「강릉방언의 초분절 음소에 대한 고찰」 『동악어문논집』 22호 동국대학교 동악어문학회)
- 上野善道(2000) 「早田輝洋著『音調のタイポロジー』書評」 『言語研究』 117 日本言語学会 pp.129-152
- \_\_\_\_\_ (2011) 「アクセント」 城生佰太郎・福盛貴弘・斎藤純男編著 『音声学基本事典』 勉誠出版 pp.305-311

- 木部暢子(2012)「西南九州2型アクセントの特性の比較—助詞・助動詞のアクセントを中心として—」『音声研究』16 日本音声学会 pp.80-92
- 高慧禎(2007)「分節音かプロソディーか—韓国語の子音と日本語の促音・非促音の音響的特徴から」『日本語学研究』第18輯 韓国日本語学会 pp.11-29
- \_\_\_\_\_ (2012)「韓国人の発話による日本語の特殊モーラとピッチパターン」『日本語学研究』第35輯 韓国日本語学会 pp.1-16
- 窪菌晴夫(2007)「鹿児島方言のアクセント変化:複合法則の崩壊」『神戸言語学論叢』5 神戸大学 pp.111-123
- 城生佰太郎・福盛貴弘・斎藤純男編著(2011)『音声学基本事典』 勉誠出版 p.314
- 早田輝洋(1999)『音調のタイポロジー』大修館書店
- 平山輝男(1951, 2010)『全国アクセント辞典』東京堂出版
- Polivanov, E.D.(1938) Zur Frage der Betonungsfunktionen Travaux Cercle Linguistique de: Prague IV. pp.75-81

〈 요 지 〉

한국어와 일본어의 음조에 관한 실험음성학적 대조연구  
-강릉방언과 가고시마방언을 중심으로-

본 연구는 한국어 강릉방언과 일본어 가고시마방언의 음조의 특징에 대해 방언별, 성별로 실험음성학적 관점에서 살펴보았다. 그 결과는 다음과 같이 정리된다.

(1)한국어 강릉방언의 음조의 특징은 음운론적으로 단어성조와 길이에 대한 악센트형의 구별은 하고 있지만, 20대 후반에서 중년층이 되면서 그 악센트형의 구별이 어려워지고 있어 악센트형의 변화가 관찰되었다. 한편 음성학적관점에서는 구음조로서 한 가지 '어말 하강조 패턴'이 나타났다. 즉 어말에서 두 번째 음절이 높게 실현된 후, 어말이 하강하는 음조패턴이 고정된다는 것을 확인할 수 있었다.

(2)일본어 가고시마방언의 음조는 하야다(1999)가 말하는 '어말 상승조'와 '어말 하강조'의 두 가지 패턴이 청년층 및 중년층에서 그 구별이 없어지고 있어 악센트형이 조금씩 변하고 있는 것이 아닌가 생각된다. 한편 음성학적 관점에서는 구음조로서 한 가지 '어말 하강조'의 패턴이 나타났다.

이상의 결과에서 현대 한국어 강릉방언의 구음조 패턴은 일본어 가고시마 방언에서 보유했던 음조의 특징 가운데 '어말 하강조'와 비슷한 패턴이 실현되고 있다는 점을 명확히 밝혀졌다고 생각된다.

논문분야 : 음성학·음운론

키 워 드 : 한국어 강릉방언, 일본어 가고시마방언, 음조, 악센트구, 피치패턴, 어말 하강조

■ **고혜정 (高慧禎)**

가톨릭관동대학교 일어일문학과 조교수

khj0226@cku.ac.kr

- 投稿日 : 2014년 09월 22일
- 審査開始 : 2014년 10월 31일
- 審査完了 : 2014년 11월 24일
- 掲載確定 : 2014년 12월 01일